pp.111～120　大和大学　研究紀要　第７巻　教育学部編　2021年３月

『更級日記』について―千年紀を迎えて―

A Study on *The Sarashina Diary (A Woman's Life in Eleventh-Century Japan)* : Celebrating the millennium

礪波　美和子
TONAMI Miwako
（大和大学教育学部）

要　旨

本論文では、『更級日記』について考察した。二〇二〇年は『更級日記』の作者菅原孝標女が、上総国から上京した年からちょうど千年にあたる記念すべき年である。『更級日記』は『源氏物語』の最初の読書記録でもある。第一章ではコロナ禍におけるオンライン授業の中、男性の漢文日記、男性が女性のふりをして書いた『土佐日記』、女性による仮名日記の特徴について解説し、更級日記千年紀について教えたことを述べる。第二章では冒頭の上洛の旅立ちの場面について、一文が長いこと、『源氏物語』への憧れの記述について考察した。第三章では上洛後の物語を手に入れる難しさと、菅原孝標女の物語への心酔ぶり、夢にまつわる記述を考察した。第四章では私が上総国国府跡などを訪れた体験と千年紀について述べた。

Abstract

In this paper, I analized on *The Sarashina Diary (A Woman's Life in Eleventh-Century Japan)*. 2020 is a memorable year, which is exactly 1000 years since SUGAWARA Takasue's daughter, the author of *The Sarashina Diary*, came to Kyoto from Kazusa Province. *The Sarashina Diary* is also the first reading record of *The Tale of Genji*. In the first chapter, I considered about Nikki(Diary): About the characteristics of men's diary written in Chinese, *The Tosa Diary* written in Kana by men pretending to be women, and diary written in Kana by women. Then I explained about Celebrating the millennium. In the second chapter, I analized on *The Sarashina Diary's* beginning. Each sentence is long. Then I considered about description of longing for *The Tale of Genji*. In the third chapter, I analized on the difficulty in obtaining the Monogatari books in Kyoto, adoration to *The Tale of Genji* of SUGAWARA Takasue's daughter, and the description of dreams. In the fourth chapter, I described my experience of visiting Kazusa Province and the millennium.

キーワード：更級日記・菅原孝標女・夢・千年紀・コロナ禍
keyword：*The Sarashina Diary (A Woman's Life in Eleventh-Century Japan)*, SUGAWARA Takasue's daughter, Dream, Celebrating the millennium, Corona virus

令和２年10月12日受理

一　コロナ禍におけるオンライン授業の中で

大和大学の一回生前期「国文学概論Ⅰ」の「第五回 国文学の形態・教材研究二（日記）」で、『御堂関白記』・『土佐日記』とともに『更級日記』を取り上げてきた。二〇二〇年度は新型コロナウィルスのため、四月当初はポータル配信での課題提示とメールでの課題提出のみで行った。非常事態宣言下、ゴールデンウィーク明けから対面の予定に替り前期はオンライン授業になると予告され、代わりにポータル配信とGoogle for EducationのClassroomとオンラインのビデオ会議システムmeetを用いた遠隔授業となった。非常事態宣言解除後六月八日からは学籍番号の奇数と偶数と交互に登校を許可する対面遠隔併用が始まり、六月二二日から全員の学生に対して希望者は対面参加の対面遠隔併用となり、七月一日から遠隔授業を中止し対面授業のみとなった。しかし大阪府において新型コロナウイルス感染者の確認件数が急拡大したため、七月一五日より対面遠隔併用に戻り、七月二〇日からは遠隔授業のみとなった。

「国文学概論Ⅰ」は一回生向け講義のため、大学での対面授業を一度も受けたことがない学生を相手に、オンラインでの講義でどのように分かりやすく説明することができるか、学生の理解度を知ることができるか等の試行錯誤となった。二〇二〇年は資料をポータルとClassroomで配信し、予めプリントアウトするよう指示した上で、meetの「画面の共有」機能を用い、学生は自宅でパソコンやスマートフォンやタブレットの画面に表示される該当箇所を見ながら、説明を聞けるようにした。学生の顔出しは恥ずかしがるだけでなく、回線が途切れやすくなり、音声も聞き取りにくくなることが判明し、教師のみ顔を出すようにした。

学生の表情が見えないと、どれぐらい理解していそうかが分からず、説明のスピードなど試行錯誤の連続となった。チャット機能でその都度質問を受付、授業終了後、A6の出席カードに質問・感想などを記入し、Classroomに提出させた。各自の質問に答え、次回の授業冒頭で取り纏めて解説し、Classroomに入力した。この方法は学生から好評であった。

「国文学概論Ⅰ」では当初、例年のプリントより配信するものを減らしていた。[1] しかしmeetの「画面の共有」機能で配信していない資料を映し説明していると、添付してほしかったという意見が複数あった。印刷しておく資料と見るだけで良い参考資料とに分けて配信するよう心がけた。要望に応え一週間前に配信しておくと、外出が制限された熱心な学生は参考資料も含め隅々まで目を通し、インターネットで興味のあることをさらに調べ、それを出席カードに書いてくれた。他の学生の感想を伝えると相乗効果で「より頑張ろう」という気持ちになったようである。

「日記」の回は、参考資料として『国史大辞典』『日本古典文学大辞典』『日本国語大辞典』の「日記」の項目などを配信し、一口に「日記」といっても、男性の漢文日記、男性が女性のふりをして書いた『土佐日記』、そして女性による仮名日記などいろいろあることを伝えた。長文の辞書項目だけでは分かりにくいため、具体的に作品を見ていった。

千年以上前の時の権力者である藤原道長の自筆が残り、世界記憶遺産に登録されている『御堂関白記』は、具注暦に記された道長の筆跡が分かる影印を、『特別展覧会王朝文化の華　陽明文庫名宝展　宮廷貴族近衛家の一千年』[2]から取り、天皇に嫁いだ娘彰子が男子を無事出産した喜びに満ちあふれ、行間に入りきらず、続きを前の日付の余白に書き記していることなど、自筆本ならではの息づかいを感じてもらうようにした。活字化された翻刻も載せ、照らし合わせて見られるようにしている。例年は、対面でカラープリントを配布するとと

もに、教室のスクリーンやモニターに当該箇所を映し出しながら解説を加えている。今年は、meetの「画面の共有」機能を用いての説明となった。対面授業が再開した後、振り返って目の前の画面で説明箇所の資料がみられ、チャットですぐ質問でき、出席カードへの感想・質問への答えがあり、気が散りにくい遠隔授業の方が、かえって集中して授業に参加できるという感想もあった。

『土佐日記』は女のふりをして書かれていても、男性官人が書いたため、一日も欠かさない「日次記（ひなみき）」となっているという特徴に着目させた。

それに対し、『更級日記』[3]は日付の記述がほとんどない。『更級日記』中の日付の記述は、「一　上洛の旅」中の「九月三日」（二七九頁）、「同じ月の十五日」（二八〇頁）、「十七日」（二八一頁）、「師走の二日」（二九三頁）、「二　家居の記」中の「七月七日」・「その十三日」（三〇三頁）、「八月になりて、二十余日」（三一一頁）、「年かへりて三月十余日」（三一二頁）、「七月十三日」（三一六頁）、「三　宮仕えの記」中の「十二月二十五日」（三二八頁）、「四　物詣での記」中の「霜月の二十余日」（三四〇頁）、「そのかへる年の十月二十五日」（三四一頁）、「五　晩年の記」中の「八月十余日」・「二十七日」（三五五頁）、「九月二十五日」・「十月五日」・「二十三日」（三五六頁）、「天喜三年十月十三日」（三五八頁）のみである。他に「ついたち」が五例、「つごもり」が五例ある。[4]

ジャパンナレッジの新編日本古典文学全集の『更級日記』の解説に、

平安時代の中流貴族の女の半生をつづる仮名日記文学

『源氏物語』に憧れていた少女―菅原孝標女（すがわらのたかすえのむすめ）は、一三歳の時に、父の任国・上総国（千葉県）より京に上る。その出来事より筆を起こし、夫・橘俊通（たちばなとしみち）と死別した翌年、五二歳のころまでの約四〇年間の半生を振り返った自伝的回想記。平安の女性の宮仕え、結婚、出産などの様子が垣間見られる。平安女流日記文学の代表作のひとつ。

とあり、頭注に「この上洛紀行は、素朴なメモをもとに、後年、回想の中で跡づけたものとして、地理的な記憶は曖昧（あい）であるが、それでも幼い日の作者の関心の所在はうかがわれよう」（二九四頁）と記される。

この数少ない日付の記述に、冒頭の「一　上洛の旅」の

十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。

（二九七頁）

がある。頭注一三に「寛仁四年（一〇二〇）。この年、孝標は上総介の任を終えた。」とあるように今年がちょうど千年にあたることを伝えた。

千葉県市原市では、「上総国府のまち　いちはら　更級日記千年紀二〇二〇」[5]を作成し、様々な説明や動画を多数公開していることを伝えた。十分の動画「【千葉県市原市】二〇二〇年は更級日記千年紀―上総国への作者の想いから紐解く当時の市原市とは」[6]と、市原市埋蔵文化財調査センター作成のイラストや地図や写真をふんだんに使った「菅原孝標の女の更級いちはら紀行　目次その1」[7]などを紹介した。

「自分でも調べてみました」というコメントを書いた学生がおり、次回の配信でURLを添えた。ホームページの紹介は、対面のみの授業よりもオンラインの方が自分でも調べやすいと感じた学生が複数いた。

二　『更級日記』上洛の旅立ちの場面について

『更級日記』の冒頭は、次の一文で始まる。

あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかり

かはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。（二七九頁）

「あづま路の道の果て」常陸（ひたち）国（今の茨城県の大部分）にあるという男女の縁を決める占いの帯である「常陸帯」を口実に、逢いたいものだという紀友則の和歌

三三六〇　あづまぢのみちのはてなるひたちおびのかごとばかりもあひみてしかな　（『古今和歌六帖』[8]紀友則）

を引歌し、その常陸よりももっと奥深い所で育った私は、どれほど賤しく教養がなかったであろうと卑下した書き出しである。世の中に物語というものがあるということを知り、どうにかして見たいと思って、暇で退屈な昼間や宵の団欒の折に、姉や継母などにいろいろな物語、『源氏物語』の主人公光源氏の暮らしぶりなどを聞き、知りたい気持ちがどんどん膨らんだけれど、作者菅原孝標女が思うように、内容を覚えて語ってくれる人がいなかったという。

講義では、読点が続き句点がなかなかない、話し言葉を記したような文章、文体であることを指摘した後、この作者の東国での状態を学生に想像してもらっている。都から遠く、物語の実物は周りになく、任国に赴く前に都で暮らしていた時に読んだうろ覚えの物語の内容を、姉や継母たちにどんなだったか思い出してもらいながら話してもらうけれど、人によって違うことを言ったり、的を射なかったりする隔靴掻痒の状態を認識してもらう。その上で、次の一文を読む。

いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて額（ぬか）をつき祈り申すほどに、十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。（二七九頁）

姉や継母たちに、物語の内容をしっかり話してもらうのは難しいと観念して、あまりにもどかしいため、自分の身長と同じ大きさの薬師仏を造ってもらい、手を洗い清め、人目の絶え間に密かに入って「都に早く上京させ、たくさんあるという物語をありったけ見せてください」と、身を投げ出して一途に祈っていたところ、十三歳になる年に上京することになり、九月三日に門出して「いまたち」という所に移った。現世利益に霊験のある薬師如来をわざわざ自分の等身大に造ってもらい、祈った内容が物語をある限り読みたいので上京させてほしいというものだった。そして、願いが叶ったのか、父菅原孝標は寛仁四（一〇二〇）年に上総介の任を終え、九月三日に京へ向け門出することになった。

年ごろ遊び馴れつる所を、あらはにこほちちらして、立ち騒ぎて、日の入りぎはの、いとすごく霧りわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見捨てたてまつる悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。（二八〇頁）

夕刻に牛車に乗ろうと振り返ると、人目の絶え間に参って額づいて拝んでいた薬師仏が立っておられるのを、見捨てて旅立つのが悲しく、人知れず涙が流れたと語っている。

「十三になる年」とあるが、古典に出てくる年齢は満年齢ではなく、『日本国語大辞典』[9]に「【数年】〔名〕生まれた年を一歳、翌年を二歳というように数える年齢。かぞえ。丸年（まるどし）。」とある数え年であることに注目させて

いる。生まれた時から一歳で、翌年正月を迎えると二歳になるという数え方で、満年齢でいうと十一、二歳にあたる。

三　菅原孝標女の夢をめぐって

この門出の年が一〇二〇年、今からちょうど千年前になる。二〇〇八年に行われた『源氏物語』千年紀ほど大々的ではないが、近年『更級日記』に注目が集まっていた。姉や継母に、光源氏の暮らしぶりなどを聞いたという記述は、上総国に赴任する前の京で姉たちが『源氏物語』に触れたことを意味し、『源氏物語』の現存する最初の読書記録でもある。

『更級日記』の現存諸本はすべて藤原定家書写の御物本を祖本とする。[10]一九九〇年に女流日記文学講座第四巻『更級日記・讃岐典侍日記・成尋阿闍梨母集』が出版され[11]、参考文献も掲出された。『更級日記』の注釈書は数多く出版されているが、最新は二〇一五年の福家俊幸著『更級日記全注釈』[12]である。また二〇二〇年、武蔵野書院創業百周年記念論集として『更級日記　上洛の記千年―東国からの視座』が出版された。[13]二〇一四年には英訳*The Sarashina Diary: A Woman's Life in Eleventh-Century Japan*がコロンビア大学から出版され、二〇一八年にはペーパーバックも出版された。[14]

二〇一九年六月二十五日に、ＮＨＫの歴史秘話ヒストリアで「物語に魅せられて　更級日記・平安少女の秘密」が、二〇二〇年八月一五日に、アニメ　ねこねこ日本史「千年前から萌えを叫ぶ、更級日記」が放映された。[15]私もＮＨＫ文化センター梅田教室で「更級日記を味わおう」[16]と題して、二〇一九年一〇月から二〇二〇年九月まで講義した。コロナ禍で三回休講、二回補講して九月二十一日に最後まで読み終えた。

「師走の二日、京に入る」と上洛を果たしたことが、日付入りで記される。九月三日に上総を発ってから、三ヶ月の上洛の旅であったことが分かる。都での住まいは、「都のうちとも見えぬ所のさま」であったが、

いつしかと思ひしことなれば、「物語もとめて見せよ、物語もとめて見せよ」と、母をせむれば、三条の宮に、親族なる人の、衛門の命婦とてさぶらひける、尋ねて、文遣りたれば、めづらしがりてよろこびて、御前のをおろしたるとて、わざとめでたき冊子ども、硯の筥の蓋に入れておこせたり。

（傍線礪波以下同。二九四頁）

と、都に残っていた実母に、ずっと読みたいと思っていた物語を求めて見せてほしいとお願いし、つてを頼って手に入れることができたという。実母は『蜻蛉日記』作者藤原道綱母の異母妹にあたる。物語を手にし、

うれしくいみじくて、夜昼これを見るよりうちはじめ、またまたも見まほしきに、ありもつかぬ都のほとりに、たれかは物語もとめ見する人のあらむ。

（二九五頁）

と、一日中読みふけった。他の物語も読みたかったが、都の郊外では、それ以上手に入れて見せてくれる人がなかったと、反語を用い記される。板本が普及する前、物語は原本と手書きされた写本しかなく紙も貴重であったため、手に入れるには高貴な人のお下がりをもらうしかなかった。

その春、世の中いみじう騒がしうて、松里の渡りの月かげあはれに見し乳母も、三月ついたちに亡くなりぬ。せむかたなく思ひ嘆くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ。

（二九六頁）

と、上洛翌年の治安元（一〇二一）年春から疫病が大流行し、乳母も亡くなり、悲しすぎて物語を読みたいという気持ちもなくなった。

かくのみ思ひくんじたるを、心もなぐさめむと、心苦しがりて、母、物

語などもとめて見せたまふに、げにおのづからなぐさみゆく。紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおぼゆれど、人かたらひなどもえせず。たれもいまだ都なれぬほどにてえ見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と心のうちにいのる。親の太秦にこもりたまへるにも、ことごとなくこのことを申して、出でむままにこの物語見はてむと思へど見えず。（二九七頁）

娘が塞ぎ込むのを不憫に思い、母が物語を探し求めてくれ、物語に親しむうちに自然に慰められた。紫の上にまつわる巻を読んで続きが読みたくて仕方がなくなり、「『源氏物語』を一巻から最後まですべて見せてください」と心の中で祈っていた。親と太秦に籠もっても、『源氏物語』を通読したいと願うのみであった。上総国で等身大の薬師如来を造ってもらい「上京させ物語をありったけ見せてください。」と祈っていた時と同じ、物語に対する一途な状態に戻ったことが記される。そしてついに、

をばなる人の田舎より上りたる所にわたいたれば、「いとうつくしう生ひなりにけり」など、あはれがり、めづらしがりて、かへるに、「何をかたてまつらむ。まめまめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくしたまふなる物をたてまつらむ」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せり河、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一ふくろとり入れて、得てかへる心地のうれしさぞいみじきや。はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちにうち臥して引き出でつつ見る心地、后の位も何にかはせむ。

（二九八頁）

と、地方から上京したおばから『源氏物語』五十余巻、つまり全巻を櫃に入れた状態で、その他にも「在中将」つまり『伊勢物語』などをもらったと記される。「とほぎみ、せり河、しらら、あさうづ」は現存しない物語である。これまで、飛び飛びにしか話を聞けず読めなかったため、ずっとじれったかった『源氏物語』を、最初から一人で几帳の中で堪能することができる気持ちを、「后の位も何になろう」と、女性最高の栄誉とされる后の位もなんとも思わないぐらい嬉しいと表現している。

昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえ浮かぶを、いみじきことに思ふに、夢にいと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻をとく習へ」といふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず。物語のことをのみ心にしめて、われはこのごろわろきぞかし、さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし。

（二九八頁）

一日中読みふけっているので、自然と『源氏物語』の文章を暗誦していて、浮かんでくる状態をすばらしいことと思っていると、夢にお坊様が現れ、女人成仏を説く『法華経』第五巻を習うよう説かれた。しかし、誰にも言わず、習おうともせず、物語のことだけを考えていたという。私は今は器量も良くないけれど、年ごろになったら顔立ちもよくなり髪も長く美しくなると信じ、夕顔や浮舟のようになると考えていたことを回想し、あきれ果てたものだったと晩年の執筆時に反省している。

その五月のついたちに、姉なる人、子生みて亡くなりぬ。（略）そのほど過ぎて、親族なる人のもとより、「昔の人の、かならずもとめておこせよ、とありしかばもとめしに、そのをりはえ見出でずなりにしを、今しも人のおこせたるが、あはれに悲しきこと」とて、かばねたづぬる宮といふ

物語をおこせたり。　（三〇五頁）

と、姉が出産後死亡し、親族から、亡き人から頼まれた時は見いだせなかった「かばねたづぬる宮」を手に入れたと送ってきたことを記す。頭注二によると散逸物語で女性の屍を求めるが叶わず出家する悲恋物語という。

『プレミアムカラー国語便覧』[17]の「更級日記」の項目に「受領階級の娘である作者が、十三歳からおよそ四十年間の人生を、晩年になって順々に振り返ったもの。さまざまな夢の内容を記すことも特徴である。」とあるように、種々の夢の内容を記すのが特徴で、『石山寺縁起絵巻』には、石山寺参籠中に眠りにつく菅原孝標女が描かれる。[18]

『日本国語大辞典』に「ゆめ - とき【夢解】〔名〕夢の吉凶を判断すること。また、他人の夢判断をすることを業とする人。夢判じ。」とあり、『蜻蛉日記』[19]天禄三年二月十七日に、「これ夢解きに問はせたまへ」（二七七頁）とあるように、夢の意味や吉凶を占うものだった。

物語のことを、昼は日ぐらし思ひつづけ、夜も目のさめたるかぎりは、これをのみ心にかけたるに、夢に見ゆるやう、「このごろ皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遣水をなむつくる」といふ人あるを、「そはいかに」と問へば、「天照大神を念じませ」といふと見て、人にも語らず、なにとも思はでやみぬる、いといふかひなし。　（三〇〇頁）

物語のことだけ考え、夢に天照大神をご信心申し上げなさいとみても、やはり、人に語らず何とも思わず終わったことを、後に反省している。

また、昔気質の母が、「「初瀬には、あなおそろし。奈良坂にて人にとられなばいかがせむ。石山、関山越えていとおそろし。鞍馬はさる山、率て出でむいとおそろしや。親上りて、ともかくも」と、（中略）わづかに清水に率てこもりたり。（三一九頁）」と、初瀬・石山・鞍馬には父親が常陸国から上京してからといい、清水にのみ連れて行ってくれたと述べる。そして「母、一尺の鏡を鋳させて、え率て参らぬかはりにとて、僧を出だし立てて初瀬に詣でさすめり。（三二〇頁）」と、僧に代参させたと記される。この僧が見た夢に、非常に気高く清楚で端正な装束を着た女が、奉った鏡に願文が付いていなかったか尋ね、願文はなかった旨答えたところ、鏡にうつる影を見よ。影を見れば悲しくなると申し、鏡に「臥しまろび泣き嘆いている影が映っていたことを伝え聞いている。でも「いかに見えけるぞとだに耳もとどめず。（三二一頁）」と、自分の将来がどのように占われたか、気にとめて聞かなかったことが記される。

聖などすら、前の世のこと夢に見るは、いと難かなるを、いとかう、あとはかないやうに、はかばかしからぬ心地に、夢に見るやう、清水の礼堂にゐたれば、別当とおぼしき人出で来て、「そこは前の生に、この御寺の僧にてなむありし。仏師にて、仏をいと多く造りたてまつりし功徳によりて、ありし素姓まさりて人と生まれたるなり。（略）」と見てのち、清水にねむごろに参りつかうまつらましかば、前の世にその御寺に仏念じ申しけむ力に、おのづからようもやあらまし。いといふかひなく、詣でつかうまつることもなくてやみにき。　（三二七頁）

聖でも見るのが難しい夢を菅原孝標女は見、前世が僧だったと見たのに、懇ろに参ることもなく、そのままにしてしまったと振り返る。

結婚後は石山寺に二度参り、初瀬にも二度参籠している。初瀬では、

三日さぶらひて、暁まかでむとてうちねぶりたる夜さり御堂の方より「すは、稲荷より賜はるしるしの杉よ」とて、物を投げ出づるやうにするに、うちおどろきたれば、夢なりけり。　（三四五頁）

と稲荷からの印の杉と夢に見たにもかかわらず、そのままにしている。

夫が期待に反し、遠い国の信濃守として赴任が決まった時、親の折の上総国

よりは近いと諦めていたが、翌年、四月に戻ってきて十月五日に「夢のやうに（三五六頁）」亡くなった。

昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心にしめて、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。初瀬にて前のたび、「稲荷より賜ふしるしの杉よ」とて投げ出でられしを、出でしまに、稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし。年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど、后の御かげにかくるべきさまをのみ、夢ときも合はせしかども、そのことは一つかなはでやみぬ。ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。かうのみ心に物のかなふ方なうてやみぬる人なれば、功徳もつくらずなどしてただよふ。（三五七頁）

と、反実仮想の「ましかば……まし」を重ねて用い、夢を見た時々に、物語や歌にばかり気を取られずに参詣していたら、急に夫を亡くすような憂き目に逢わなかったのではと後悔している。

さすがに命は憂きにもたえず、長らふめれど、後の世も思ふにかなはずぞあらむかしとぞ、うしろめたきに、頼むことひとつぞありける。天喜三年十月十三日の夜の夢に、ゐたる所の家のつまの庭に、阿弥陀仏たちたまへり。（略）こと人の目には、見つけたてまつらず、われ一人見たてまつるに、（略）仏、「さは、このたびはかへりて、後に迎へに来む」とのたまふ声、わが耳ひとつに聞こえて、人はえ聞きつけずと見るに、うちおどろきたれば、十四日なり。この夢ばかりぞ後の頼みとしける。（三五八頁）

と、『更級日記』末尾近くに、『更級日記』中、唯一、年月日を記す箇所がある。夢の中で自分にのみ阿弥陀仏が見え、後に迎えに来ようと約束した。この夢だけを後世の頼みとしたと記す。

夫の死後、約四十年間の半生を振り返る『更級日記』には、物語に熱中したことは記されるが『浜松中納言物語』『夜の寝覚』などの作者と有力視される菅原孝標女自身が物語を書いたことは微塵も記されない。

四　上総国国府跡訪問記

菅原孝標女に因む千葉の房総半島は三密（密集・密閉・密接）にならないと二〇二〇年三月十九日に訪れた。まず最初に市原市役所に行った。京葉ガスのホームページ[20]に「高台に建つ市原市役所（地下一階地上一〇階）の屋上は「ちば眺望一〇〇景」のビュースポットである。」と記されていたからだ。しかし、屋上には上れないことが判明した。二〇一一年三月一一日に起こった東日本大震災の地震災害のため、老朽化した第二庁舎（旧本庁舎）は五階までしか上れず、新設された第一庁舎（防災庁舎）に移動、配置換えされていた。受付で教えてもらった市原市教育委員会ふるさと文化課で「上総国府のまち　いちはら　更級日記千年紀二〇二〇　更級日記作者菅原孝標女」の缶バッジやパンフレット「上総国府のまち　いちはら　更級日記千年紀二〇二〇」をいただいた。パンフレットには「二〇二〇年は、更級日記の作者である菅原孝標女が、上総国府のある市原市から京に旅立って千年の節目の年です。」と、二〇一九年一〇月二四日には「平安時代の衣装を着て、小湊鐵道の房総里山トロッコに乗車」する平安トロッコ列車イベントが開催、二〇一九年一〇月五日・六日には「第九回　上総いちはら国府祭り」更級日記旅立ち行列や衣装着装体験、缶バッジ作成などが行われることが記される。Alan Drake Haller氏のブログ「【レポート】上総いちはら国府祭り 二〇一九―蘇る平安行列と市原の心意気[21]」には、祭り当日の様子が多くの写真入りで説明され、上総更級公園とその

近辺で二〇一一年から始まったもので、時代絵巻行列が祭りの目玉という。千年紀にあたる二〇二〇年は、感染拡大防止のため上総いちはら国府祭りの中止が六月に発表された。

市原市役所では、「二〇二〇上総国府のまち　いちはら　更級日記千年紀市原市観光協会」ののぼりや、「更級日記作者　菅原孝標女」の顔ハメ看板を見た。また、市役所ロビーには、国分寺七重塔復元模型があり、写真撮影できた。受付では、「国指定史跡上総国分寺跡」「国指定史跡上総国国分尼寺跡」のパンフレットや、周辺の地図をもらった。

市役所をはさんで歩いて行ける範囲に国分寺跡と国分尼寺跡がある。しかし、国分尼寺跡にはコロナ禍のため入れないとのことであった。復元回廊などは見ることができるのではと訪ねたが、敷地の入り口が展示館で、「新型コロナウィルス感染症の予防及びまん延防止のため、三月三一日（火）まで休館とします。ご理解とご協力をお願いします。史跡上総国分尼寺跡展示館」の掲示がされ門が閉ざされていた。敷地のフェンスで囲まれた外から、微かに見やることはできた。

市原市長が菅原孝標に扮する五分四十秒の動画「更級日記千年紀 西暦二〇二〇年 上総国府のまち いちはら プロモーションビデオ」[22]冒頭は回廊で撮影されている。国分寺跡には入れたが、広い敷地に薬師堂や将門塔や礎石などが残るのみであった。ＪＲ内房線五井駅に続く道「更級通り」で、駅の手前で菅原孝標女の銀色の像に出会うことができた。

七月一〇日にホームページ[23]で「更級日記千年紀文学賞を創設」がうたわれ、継続していきたいと述べている。九月二〇日のフォーラムと九月二六日の講演会が延期となり翌年三月を予定する。大規模なイベントは中止・延期を余儀なくされたが、小規模なものが次々企画されている。

夢ホールでの一〇月四日から八日の（一）記念展示と体験と一〇月四日の（二）記念イベントの「更級日記千年紀記念行事」は開催された[24]。横笛の山田路子氏のブログには、規模を縮小しながらも千年紀にイベント開催できた事を感謝し初めて牛車に乗ったことが記され、二十五絃箏の喜羽美帆氏のブログにも演奏の様子などが写真とともに記される。市原市議会議員小沢みか氏のブログの写真に写る立て看には「二〇二〇　上総国府のまち　いちはら　更級日記千年紀　夢ホール記念展示　記念製作「牛車」お披露目展示」とある。

九月三〇日『日本経済新聞』[25]文化欄には、「更級日記、東国知る史料に」「一〇〇〇年前の旅の記録に光」との見出しで「菅原孝標女が書いた回想録「更級日記」は、ちょうど千年前、一〇二〇年の「上京」の記録から始まる。平安女性の生涯を伝える古典として読み継がれてきたこの作品に、歴史研究の観点から光が当てられている。個人の内面の記録にとどまらず、史料としての価値が見いだされているのだ」と記される。

コロナ禍で私たちが未経験の出来事が次々と起こっている。『更級日記』の中にも疫病が大流行し、乳母も亡くなったことが記されている。

『更級日記』全編を講義するためにいろいろ調べたことで、旅立ちの日や死など大切な箇所に日付が記されていること、『源氏物語』などの物語への憧れの場面、夢解きをせず過ごしてきたことへの後悔などに着目することができた。来年度以降「国文学概論Ｉ」の講義で冒頭箇所だけでなく、より『更級日記』のことや作者のことを伝えていきたい。

注

（1）「授業目的公衆送信補償金制度」の施行が四月二八日になったことも影響する。https://project.nikkeibp.co.jp/pc/atcl/19/06/21/00003/04200071/

二〇二〇年一〇月一二日閲覧（最終閲覧日ー以下同）

（2）『陽明文庫名宝展』京都国立博物館　二〇一二年図録。
（3）新編日本古典文学全集26『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』小学館、一九九四年。以下、頁は開始頁を記す。
（4）用例検索にジャパンナレッジの新編日本古典文学全集を利用した。
（5）上総国府のまち いちはら 更級日記千年紀二〇二〇 https://sarashina-sennenki.com/
（6）上総国への作者の想いから紐解く当時の市原市とは https://www.youtube.com/watch?v=iVTgBZ1NCm0
（7）市原市埋蔵文化財調査センター http://www.city.ichihara.chiba.jp/maibun/sarasina2/mokuji1.htm
（8）新編国歌大観二ー四、二三九頁ａ『古今和歌六帖』、角川書店、一九八四年。
（9）『日本国語大辞典』第二版　小学館　以下同。
（10）『日記文学事典』勉誠出版、二〇〇〇年。
（11）女流日記文学講座第四巻、勉誠社、一九九〇年。
（12）『更級日記全注釈』角川学芸出版、二〇一五年。
（13）『更級日記　上洛の記千年』武蔵野書院、二〇二〇年。
（14）*The Sarashina Diary: A Woman's Life in Eleventh-Century Japan,Columbia Univ Pr*
（15）https://gyao.yahoo.co.jp/store/episode/A041967027999H01でレンタル有。
（16）テキストは角川ソフィア文庫『更級日記』二〇〇三年を使用。
（17）『プレミアムカラー国語便覧』数研出版　二〇一七年。
（18）歴史秘話ヒストリア「物語に魅せられて」に石山寺にての映像有。
（19）新編日本古典文学全集13『土佐日記 蜻蛉日記』小学館、一九九五年。
（20）京葉ガスhttps://www.keiyogas.co.jp/home/park/hureai/keikan/detail_5.html
（21）Alan氏ブログ https://alan-d-haller.info/chiba/kazusaichiharafestival2019/
（22）プロモーションビデオ https://www.youtube.com/watch?v=F9OtERj7uQs
（23）注（5）前掲ホームページ「二〇二〇年イベント情報」
（24）山田路子氏ブログ http://shinobue-michiko.com/archives/14737
喜羽美帆氏ブログhttps://ameblo.jp/kotomiho1/entry-12629476559.html
小沢みか氏ブログhttps://go2senkyo.com/seijika/27337/posts/172374
（25）『日本経済新聞』二〇二〇年九月三〇日朝刊　四六面